

海外にある日本人学校や補習授業校などの在外教育施設に派遣されたことがある先生は、意外とまわりにいるものである。そんな派遣教員のための会がある。福島県国際理解教育研究会である。毎年2月に、総会・派遣実践報告会・壮行会・懇親会を行っている。ところが、ここ数年は書面開催となっていた。

今年度は3年ぶりに対面での開催となった。実践報告会では、6名の先生方の報告を聞くことができた。派遣先は、ドイツ、インドネシア、マレーシア、タイ、ミャンマーだった。今回は、以前までの報告との違いがあった。派遣年度が、平成30年度から令和2年度までの先生方である。コロナ禍における海外日本人学校での生活や教育活動に関わる報告となった。

海外で生活するだけでも日本のようにはいかない部分が多いところに加えてコロナ禍である。それも、国によってコロナ対応が違う。話を聞いていると、とても日本国内の比ではなかった。派遣国の方針などにより、日本人学校が休校となる。先生方が、やむなく自宅からオンライン授業を行う。中には、日本に帰国してしまう子どももいる。国によっては、日本に帰国せざるを得なくなった先生方もいる。帰国しても、自宅には戻れずに隔離生活を余儀なくされる。ミャンマーでは、クーデターもあった。政情不安は、学校運営にも生活にも大きな影響を与える。

予想はしていたが、日本人学校のオンライン授業は日本よりも進んでいた。派遣された先生方は、限られた環境の中で、「やるしかない」という覚悟をもって、教材を準備し、可能な限り授業を行っていた。実にたくましい。海外では、日本以上に命を守ることと学びを止めないことに神経を使わなければならない。

6名の先生方の中には、複数の見方や考え方、尺度やものさしがあるはずである。派遣前までのものに派遣後追加されたものもあるだろう。海外でのコロナ対応と日本でのコロナ対応を比べて考えたこともあるにちがいない。考えたり判断したりするための視点が上がっていることが重要である。

これから派遣される先生方は、期待感はある半面、何かと不安なはずである。そこで、この研究会では、壮行会を開き、情報交換や激励の場としている。そして、派遣先から戻ってきたら、報告をしてもらう。そうやって、派遣教員にとっての拠り所となれるよう会を運営している。

今年度、対面で開催した結果、改めて顔を合わせるこの意味や大切さを実感することができた。報告して下さった先生方の海外でのご苦勞が直接伝わってきた。苦勞は苦勞なのだが、見方を変えれば貴重な経験である。6名の先生方は、大変ではあったが、貴重な経験をさせていただいたという捉え方をしていた。ここが重要である。

ちなみに、文部科学省の CLARINET を検索すると、「補習授業校教師のためのワンポイントアドバイス集」というものがある。そこには、指導案、話術、発問、板書、指名、音読・朗読、指導技術、視写、作文、漢字・書写などの項目がある。いずれも、日本国内の学校でぜひ参考にしたい内容となっている。ぜひ参照願いたい。